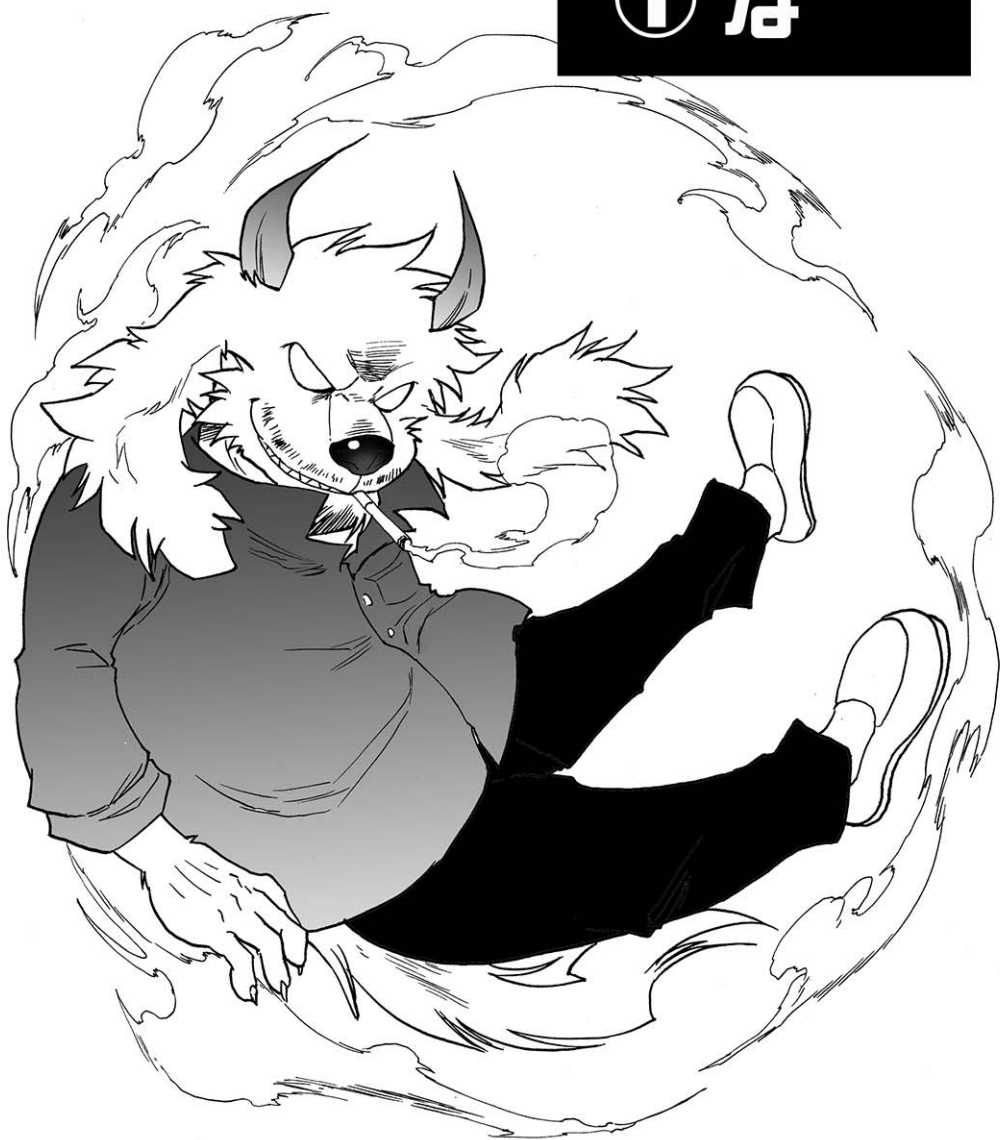
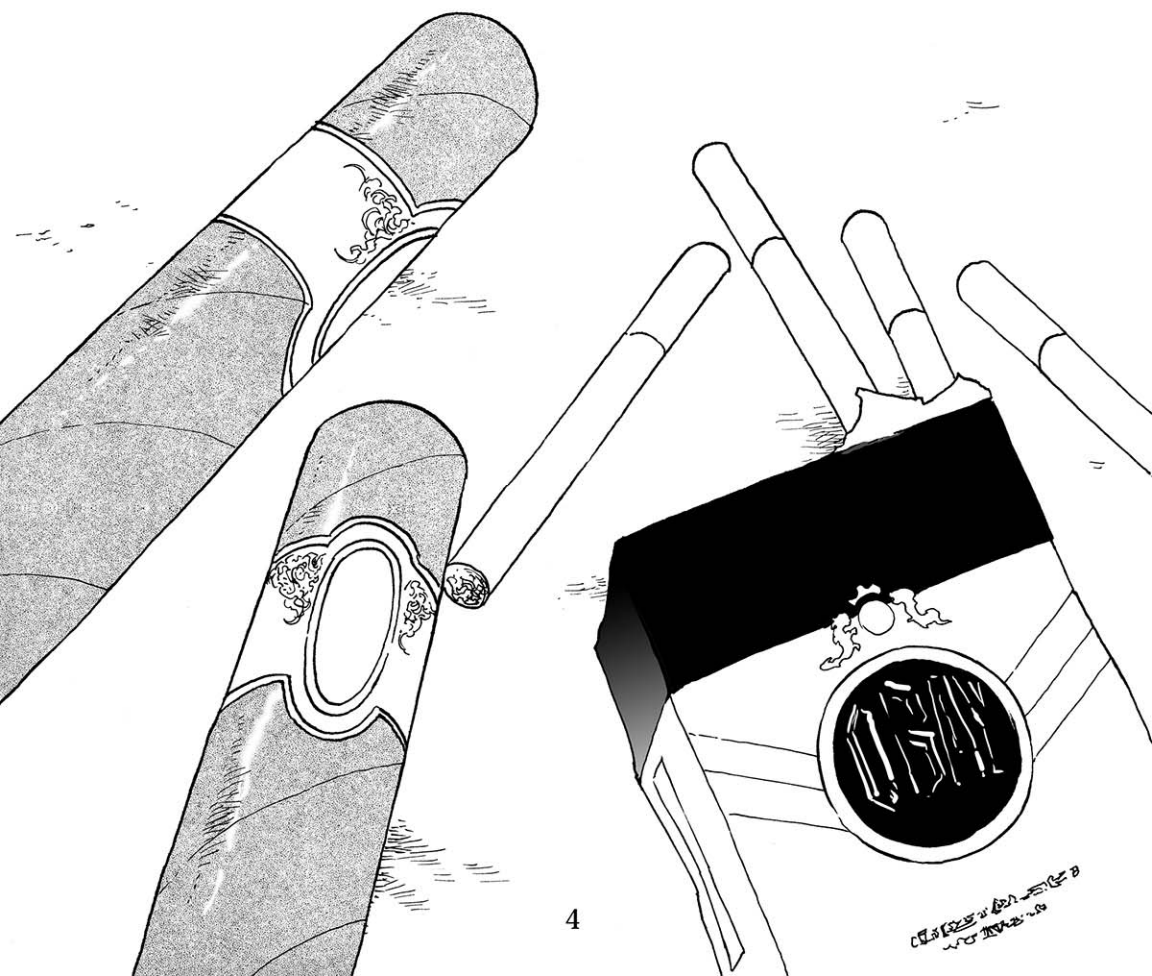


カスと
不思議な
ケムリ①



第三章·····	68
第二章·····	44
第一章·····	5



第一章



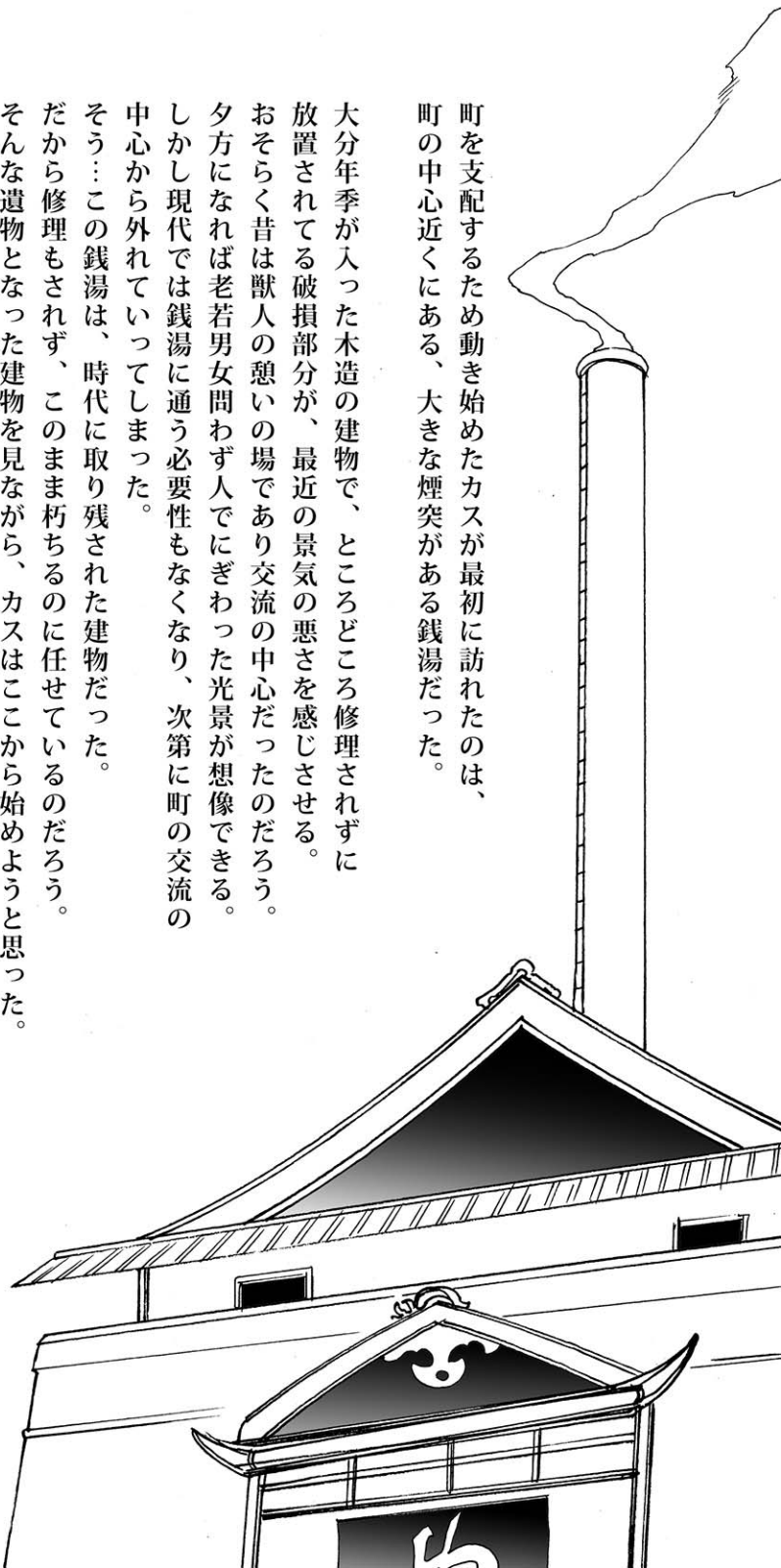
とある地方の小さな町の駅に、
その男は降り立った。紅いシャツに
ベージュのチノパンを履いたラフな格好のいでたち。
顔には黒のサングラスをかけていて、
その表情はうかがい知れない。
しかし男は全身からフェロモンのような、
人を惹きつける熟した雄の魅力なようなものを醸し出していた。

男はサングラスの下の深紅の目をこらし、
歩きながら町の様子を観察した。
都会のように人の多くない地方都市、
そこからさらに電車で数駅離れた町。
寂れてるわけではないが、栄えてるかと言われたらそこまではない町。
男が探していた町の条件とかなり合致していた。

ニヤリ、と男は心の中で笑った。
(いい感じの町だ…ここにしよう…
ここに『楽園』を築こう…)

男は胸ポケットからタバコを取り出すと、口に咥えて火を点けた。





町を支配するため動き始めたカスが最初に訪れたのは、町の中心近くにある、大きな煙突がある銭湯だった。

大分年季が入った木造の建物で、ところどころ修理されずに放置されている破損部分が、最近の景気の悪さを感じさせる。

おそらく昔は獣人の憩いの場であり交流の中心だったのだろう。夕方になれば老若男女問わず人でにぎわった光景が想像できる。

しかし現代では銭湯に通う必要性もなくなり、次第に町の交流の中心から外れていってしまった。

そう…この銭湯は、時代に取り残された建物だった。

だから修理もされず、このまま朽ちるのに任せているのだろう。

そんな遺物となった建物を見ながら、カスはここから始めようと思った。

(げへへ…いいなこの銭湯…町の中心にありながら人々から忘れられてる建物…ここを最初に墮とせば色々やりやすくなりそうだ…)

カスは口の端を歪ませ、邪悪な笑みを浮かべた。

俺がこの銭湯を再び人で溢れるようにしてやろう…但し俺好みのな…。

そんなことを考えながら、カスは銭湯の暖簾をくぐった。

外観通り、中も昔ながらの趣の銭湯で、下足場には

木造の年季の入った松竹錠付きの下駄箱があった。

カスは靴を脱ぎ、靴を下足箱に入れ錠を抜いた。

そして男湯のすりガラスの扉を横に開け、店内へ入った。

「あつ、いらっしやいませー」

入って右側の番台の上から、

若い男の声でカスを歓迎する声が出た。

カスがそちらへ視線を上げると、そこには若い虎獣人が番台に座っていた。

こんな古い銭湯の番頭が、彼のような若い虎獣人であることにカスは驚いた。

と、同時にカスは内心で喜んだ。なぜなら彼がとても『美味そう』だったからだ。

虎獣人はいつも暇だからだろうか、眼鏡をかけ読書をしていたらしく、

手には文庫サイズの本が握られていた。しかしそれよりも目を引くのが、

彼の逞しい体つきだった。白の素朴なタンクトップを盛り上がった大胸筋と、

肩が押し上げてその存在を主張しており、とても立派だった。

「お客さん初めてですね？大人三百円になります、

シャンプーや石鹸は持参しました？必要ならおっしゃってください」

